

今・むかし新聞

第6号
平成30年3月

『戦争体験を語り継ぐ』

昭和二十（一九四五）年の第二次世界大戦（太平洋戦争）の終戦から七十年以上が過ぎ、当時の苦しかったこと、悲しかったことなどを、実体験として話すことの出来る方は少なくなっています。同時にその話をするのは辛く、悲しく、いやなものです。しかし、戦中・戦後の真実を語り継いで行かなければなりません。

昨年に引き続き、厳しかった時代（戦中・戦後）の思い出を「語り部」の皆様にご提供いただきました。

「野球」

武 恒雄

昭和二十二年新制中学へ入ってからだが、休憩時間には教室を飛び出して、空き腹ナンノソ、自分たちで作ったボールや棒切れを振り回し、野球らしい遊びに熱中し始めた。

調べてみると前年には早くもプロ野球のリーグ戦が再開されており、神宮での六大学戦も大入りだったようだ。田舎から転校してきたばかりの私にとっては全く目新しいゲームなのに、見様見真似ですぐ仲間入りをしていた。

さらに翌二十三年の春先には名人対田久徳監督ひきいるフライヤーズの練習（スプリングキャンプ）を見て、一時間も歩いて多摩川河川敷まで通うファンになっていた。

暗く重苦しい空気が打ち払われ、一転、自由を謳歌する時代の到来と、好奇心も行動力もふくれ上がる少年期を同時に迎えた私の道連れは野球であったのだ。

やがて学校を代表する野球部が誕生すると、応援団の一員となり、興味の対象もアチラコチラ間口を広げていったが、現在でもテレビ観戦を楽しんでいる。

ご遺属は日ハム・ファイターズである。



「あの頃、あの頃の思い」

山口 和良

平成三十年を迎え新しい年号の話題も取り沙汰され、戦後七十三年目に当り、ふと、七十三年前の思まわしい記憶がよみがえってきます。

私は当時小学校三年生。学童疎開で親元を離れ、栃木県那須の塩原温泉、「上会津屋」と云う三階建の旅館が疎開先でした。あの昭和二十年八月十五日天皇陛下の玉音放送を聞きました。九才の自分にはあの御言葉が理解できませんでした。先生を始め大人の人のすすり泣きまたひれ伏す人など、異様な雰囲気でした。ただ子供心に恐ろしく思まわしい戦争が終わり、日本は負けたのだと云う落胆と一方安堵感を心にひしと感じました。家族のもとに帰れると云う喜びとうれしさがあふれて、夜、床の中で眠れませんでした。学童疎開生活があまりにも悲惨だったからです。

上会津屋に着いたその日の夕食に魚が付いてきました。肉はもちろん、以後口にすることはありませんでした。翌日からは米七分大豆三分の御飯とお椀一杯の重湯の一膳めし。おかずは山で採ってきた山菜類や切り干し大根の煮つけ。ピンポン玉ぐらいのジャガイモの煮つけ。栄養失調の児童が続出しました。お腹がすくのでこんな生徒も居ました。

先生の目を盗んで旅館を抜け出し近くの家の仏壇の供えものを失敬し食べ、歯磨き粉まで嘗めて空腹を紛らわした事もありました。



あるとき、支給されたマーガリンを見て、深夜食堂にしのび込み、油カんに指を入れなめました。翌日指跡が残っており、先生から往復レシタの上、「非国民」、「不屈き者」と罵られました。今の子供達には経験したことのない出来事が走馬灯のように浮かんできて心に深く、そしてなつかしく思い出されます。

「戦後の食糧事情」

井上 繁

戦争が終わって平和がきたと言っても、空襲の恐怖が去っただけであって、日々の生活は厳しいものでした。特に深刻だったのが食糧事情。主食のお米は配給制度と名ばかりで、お米が配給されることは極めて少なく、

代替えとしてはさつまいもでした。そのさつまいもにしても航空機の燃料用であるエタノールを取るための品種とか図体は大きい甘味の無い代物。それでもさつまいもは未だ良いほうで、動物向け飼料用の乾燥トウモロコシだったり、時には海藻麺とかいう得体の知れない物だったりなど、およそ今の人が口にしたら恐ろしくすぐに吐いてしまうような物が配給されたのです。

配給に頼っているだけでは生きてはいけません。都会の住民は農村地帯へ買い出しに行きました。農家にしても統制下にあり、決して豊富に持っていたわけではないものの、生産者だけにいくらかの余剰がありました。だからと言ってお米を分けて貰うのはなかなか難しく、お金のほかに着物を持って行って何とか分けて貰えたとかいうような状況でした。お米を持ち運ぶことは当時の食糧管理法上、違反行為なので、たとえ買えたとしても持ち帰る途中で警察の検問に合えば取り上げられてしまいました。

当時、私は父と二人東京暮らし。母や弟妹たちの疎開先に食糧を取りにしばしば出向きました。疎開先が農村だからといって、母にしてもお米はなかなか入手できず、主に運んだのはさつまいもとカボチャでした。三つのカボチャを縦に結んだものを両方の手に下げ、さつまいもを入れた手縫いの布袋を背中に背負う。当時中学二年生前後の私は、手元にある学校の成績表を見ますと、身長百三十五センチで体重は三十キロ、昨年度文科省の発表によると、現在中学二年生の平均身長百五十三センチで体重四十九キロ。ほぼ栄養失調状態の私にとって、その荷は重かった。



それこそ汽車にしても常に満員。客車はデッキまで乗客一杯で扉は開かないことが多く、窓から乗り込むことは極く普通のことでした。

「終戦直後の学校生活」

中嶋 房子

私は、昭和十八年四月に桜田国民学校に入学しました。当時の教育は『良い子、強い体、正しい姿勢』。教壇の上の額が目につかびます。入学すると、一年生だけ、真白い作りの地下防空壕に入る練習をしました。

今考えると軍国主義とか国家主義とか、要するに国民に批判精神みたいなものを持たせない、命令に従いやすい国民をつくる。そういう中で学校生活が始まりました。

一年生の初めての書き初めは『つわもの』と書いたのを憶えておられます。昭和十八年十二月に文部省が縁故疎開を奨励したため、昭和十九年四月に茨城県の間宮に疎開しました。田舎でしたから着物を着ている子、素足でわら草履の子、トイレが屋外である事等々、戸惑う暮らしでした。

休みの日は、出征した方の農家に行って、芋掘り

の手伝い、軍馬の干草刈り、たんぼに入ってヒルに吸いつかれ、今の子供達ができないことを体験できました。他にも戦地への慰問の手紙、家族で慰問袋を作りました。

世の中、規律正しく、先生の云うことを聞く、枠にきっちりハマっていなければならぬ教えのようでした。朝礼で、校長先生がいつも白い手袋をはめて、教育勅語をつやうやくと読まれた姿がセピア色になって思い出されます。

胸に徽章をつけ、地域の班ごとに歩調をとって、田んぼ道を集団登校したこと等、毎日警戒警報、空襲警報に怯えました。女学生の特、六年生の兄、私、母と心細い日々でした。日立市が艦砲射撃をされると間もなく、八月十五日に終戦を迎えました。

奉安殿もなくなり、先生も困ったことでしょう。私達に何と言っていたか、何かおかしい、男の子たちが非常に反抗的になりました。一番大きなことは、教科書を黒塗りしたこと。黒塗りのページが毎日変わり、終身、歴史、地理、そういう授業がなくなりました。翌年位にペラペラのパンフレットみたいな教科書紙をいくつかに折って裏表に印刷してあるものを自分で切って、きれいな糸で綴じ楽しみました。



急に自由研究がはやり、社会科という教科ができて、桜田小学校が“桜田プラン”として研究校になりました。あの、ものの無い時代に、各自、みかん箱を机にアメリカ式の自由教育が始まったのです。

「三月十日東京大空襲」(義母よの聞き取り)

宇和島 常子

昭和二十年三月十日の際、聞けば夫の家では劇的なことがありました。日本橋北新堀町（現箱崎町）の家では三月九日に田舎に発送すべく、大きなものはピアノを始め全て梱包を終え、明十日午前六時に汐留の日通から引き取りに来ることになっておりました。

義父は町会の役員をやっていた関係上、私情に構っておられず、十日早朝、空襲警報発令と同時に飛び出して行ったそうです。

その時、玄関にあった荷物をひとつ防空壕に放り込んだのです。その中には、夫の姉の桃の節句の御雛様がありました。それだけが残る、全て家が灰と化しました。義母は火の粉を避け、十三才の長女と五才の三男の手を引き、二才の四男をおぶり、永代橋際の東新倉庫の脇から伝馬船に乗り移り大川（隅田川）へ避難しました。この時、義母は三十五才でした。（長男

(夫)と次男は縁故疎開中)

その日は、風が対岸の深川(江東区)寄りに吹いており、火が燃え盛る岸壁に船が吹き寄せられて行き、何艘もの伝馬船がその火の粉によって燃え上がり、熱さに我慢できなくなった多くの人が川に飛び込んだようです。義母も子供達を抱きしめてただひたすらに「南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏」と唱えていたそうです。この船にも火が移りだし何人も人が大川に飛び込み『もつだめだ・』と義母は覚悟したと言います。その時、突然船が引つ張られる

よつになったので、見ると、蒸気船が二、三隻燃え残った伝馬船を川上の清洲橋方面へ引つ張って行ってくれたのです。「ああ・これで命が助かった」と手を合わせたと言います。子供達にせかさされ立ち上がり、自宅のある北新堀町に向け、歩き出しました。ようやくたどり着いた時、焼け落ちた家の前で、一人呆然と立ち尽くす夫の姿がありました。子供達は一目散で駆け寄り諦めかけていた夫も家族を目の前に、嬉しい再会でした。



一方、長男(9歳)次男(7歳)は、岐阜の叔母の家に縁故疎開していましたが、岐阜もだんだん危なくなり、滋賀の親戚に移りました。その二カ月後の中部東海地方の大空襲で二人を世話してくれた叔母が直近で焼夷弾を受け、なくなりました。

関東大震災・東京大空襲と大変な苦勞を重ねた義母も、夫を亡くした後半世紀以上子どものために生き抜き、平成二十一年(2009年)一月、白寿九十九歳を迎え旅立ちました。

※「東新倉庫」戦時中の偽装名・三井倉庫(現西武「伝馬船」動力機関が無い荷物を運ぶ木造船・はしけ「蒸気船」引き船・タグボート

「私の戦後の新橋・銀座」

細矢 隆久

昭和二十年、日本が戦争に負けて平和が訪れました。驚いたのは私の住んでいる新橋や隣の銀座の人々の立ち直りの早さでした。新橋駅前の闇市(私はその中を通って毎日登校しました)や銀座通りの何百軒の夜店銀座八丁目から四丁目その先の京橋方向まで毎日お祭りの様で大勢の人であふれ大変な賑わい振りでした。今でもあのアセチレンランプの匂いが忘れられませんが、私の生まれた新橋一丁目あたりから銀座は幸にも空襲にも遭わず戦前から有る町の姿が残っていて、三越松坂屋、松屋(米軍のPX)購買部になっていました(が)等のデパート、歌舞伎座、日劇、東劇等の劇場数々の映画館が客を集めていて毎日が非常に刺激的でした。子供心にも戦争に負けてしまったけど、こんな

に早く立ち直って行く日本国、日本人は本当にすごいなと思いました。でも一方で銀座和光の角で、ずらりと並んだシューシャインボイス(靴磨き)、有楽町駅のまわりの夜の女と言われた人々等、影で大変な苦勞した方々が多数いらした事を忘れてはいけないと思います。



でも国民が力を合わせて現在の日本国に作り直した事は本当に素晴らしいことだと思っています。その意味で「日本アップル」と思います。

最後に、今は無くなってしまった銀座の柳が恋しいです。

「大学は出たけれど」

神代 忠男

私は現在九十五歳。昭和十八年に、あと一年で卒業の大学を、所謂「学徒出陣」として「仮卒業」という名で軍隊に入りました。二年の軍隊生活も敗戦により終り、何とか生きて帰りました。

併し、戦後の東京は焼け野原。これから日本はどうなるのかと思いました。大学に行き復學を願いましたが、もつ卒業証書を出しているから駄目とのこと、就職しようとしたが、平和産業転換中の会社は新入社員をとってくれません。その時私は都会生まれの大学卒業生の悲哀を感じました。これが農業、漁業等地方に生まれていたら、親代々のノウハウで農村青年、漁業青年として働くのに、都会生まれは大学を出てもサラリーマンしかないと困ったわけです。



ところがどうでしょう、終戦時に四十九校しかなかった大学が、平成二十二年には七百七十八校と約十六倍に増えていたのです。若者が減っている現在、大学をこんなに増やしてどうするのでしょうか。その上、地方の若者は都会の大学生活に憧れ、都会の大学生活を終えると、家業を継ぐ意志が無くなり、都会の魔力に引きずられ、そして卒業しても大学で学んだことが全く役に立たない。都会の底辺にいつもれる者が多く居る現況です。

大学は、本当に學問を好み大学で学んだことで世に役立つ青年が行くべきでしょう。「大学を出たけれど」と云う言葉がある如く、十六倍にも増えた大学は今やその価値を失っていますか?

私はそれでも大学に学んだ唯一の幸運を挙げなければなりません。私の学んだ大学の特色の為であったかも知れませんが、それはそこで生涯の刎頸の友を多数得られた事です。

これは私が大学に感謝する最大の事です。(残念なこと、これ等の親友はもつこの世に居りません)・・・

(さびしいー)

併し、何といっても大学が多すぎます。地方人口の老化現象にも大いに関わる問題と思われるます。

「聖坂小学校」

高橋 邦子

昨年十二月十日、ひとり暮らしの姉が港南の都営アパートで倒れ亡くなりました。日曜日で発見が遅れ、警備会社の方が病院へ搬送してくださいましたが、意識が戻る事もなく、三日後に亡くなりました。菩提寺でもある三田四丁目の「薬王寺」で兄弟妹甥姪での家族葬もにぎやかに送る事ができ、お寺には感謝しております。遺品を整理しておりましたら、今は廃校となって聖坂を登って行きましても、跡形も無くなってしまった聖坂小学校の写真や機関紙が沢山出てきました。

姉は昭和四年生まれ。芝浦小学校はまだ開校されてなく、東京市聖坂小学校と表紙の文字。セピア色の写真には、木造校舎に日の丸国旗が掲揚され、全校生徒の集合写真や先生方職員の写真。男女共学では無かったので、男組、女組の別々のクラス写真。セーラー服姿の姉も写っています。終戦時、姉は戸板女学校在籍でしたが、二十年五月二十五日の空襲で家は焼失。家業のつり船屋も廃業。戦後の食糧難のなか、私達幼い兄弟のため、戸板女学校も中退し、家計を助けるため働いてくれました。無理が祟って結核を発症。相模原病院で療養生活を送ったこともあり。幸せな結婚生活も無く、戦争中は芝浦に留まり、(私達は栃木に疎開していましたが)戦争の犠牲になった青春時代だと思います。



姉の生きた証は、聖坂小学校でのアルバムや同窓会での集合写真です。桐ヶ谷斎場では「お姉ちゃん有難つ」と最後のお別れをしました。今は廃校となり跡形もなくなってしまった聖坂小学校の事も、私は生涯忘れません。

「戦争の話ア・ラ・カルト」

中嶋 弘

「青春放送」

昭和二十年八月十五日、天皇陛下ご自身の声で終戦の詔勅が放送された。受信状態が悪くほとんど意味不明だったが、日本が戦争に負けたということがなんとなくわかった。なにより嬉しかったのは、明日から、いや、今日から空襲が無いんだ、夜も電気が点けられるんだと思ったこと。艦載機がパイロットの金髪の顔が見えるほどの超低空で飛来しても全く危機感が無くなった。



「青春教室」

戦災で家を焼かれ、行く所も無い人達は、焼け残った柱

やトタン板を集めて掘立小屋、バラックを建て、使えるようなものをかき集めて耐乏生活に知恵をこぼした。教室も無く机もない学校では、青空教室で授業が開始され、教科書も軍国主義的な部分は墨で塗りつぶして使用された。新橋駅前には青空市場「闇市」が間もなくでき、お金さえ出せば大概のものが手に入った。

「経済再建への道」

GHQは経済安定九原則を発表。またトジ氏により一ドル三百六十円の為替固定レートを設定した。これにより日本は輸出大国と成り大いに潤った。又シャウプ氏(シャウプ勅告)の指示により、直接税を主体とする税制になり、又徴税の強化を指示した。ドッジラインとシャウプ勅告が二本柱となり日本を支えた。

「新田切替」

昭和二十一年二月、旧円の封鎖預金からの引き出しは、世帯主参百円、家族ひとりにつき百円とされた。私の記憶では、ある日突然この法律が施行された。

「インフレ」

経済は物資の不足によって、東京ではインフレが爆発的に進行し、戦前の二百倍にも達した。

「演劇の話」

戦後一番早く復活した演劇は、終戦翌年の昭和二十一年四月、東京劇場の市川猿之助、水谷八重子の「沈丁花」他のようです。入場料は五円十銭、十六円と伝えられています。この他帝國劇場、有楽座、日本劇場、飛行館ホールも営業を再開しました。NHKが飛行館ホールから毎週「農村の夕べ」を放送していて、家が近かったもので、見学に行つた記憶があります。

「ぼーんの『語り部』ってなに？」

平成十三年「生涯学習ボランティア講座」事業として生涯学習センター内校田小学校記念室で区民を中心とした「昔の港区」の学習会を始めました。

平成十五年からは、これまでの学習成果の発表の場、また小学校の学習支援活動として、語り部のメンバーが小学校に出向き、子どもたちにいろいろな昔の話をしています。地域の歴史や暮らし、また戦争の貴重な体験など、過去を風化させずに未来へ語り継ぐことが大切であると考えているからです。

「みなと・新橋 今・むかし新聞」もその一環として発行しています。興味のある方は、ぼーんまでご連絡ください。



発行・問合せ

住所 〒105-0004 東京都港区新橋三十八番三
電話 03-3433-1166

公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団

港区生涯学習センター(ぼーん)